

芥川龍之介『南京の基督』からの問いかけ

—「知」と「信(信仰)」のゆくえ—

樋 口 紀 子

一. はじめに

『南京の基督』は、一九二〇(大正九年)七月一日発行の雑誌、『中央公論』に発表され、後に『夜来の花』(一九二二(大正十一年))に収められた作品である。また、この作品は、芥川龍之介の「切支丹物」の一つで、執筆時期としては中期に分類される。芥川がキリスト教に造詣が深かったことは有名であるが、その芥川の全作品の中で「切支丹物」は一割を超え、しかも芥川の作家人生の中で、初めから終りまで満遍なく書き続けてられている。その中でこの作品は、駒尺喜美氏の分類によれば、「肯定的キリシタン物」と「否定的キリシタン物」のちょうど中間に位置する作品であるとされる。⁵⁾

実際に、芥川自身「僕は千九百二十二年來、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短篇やアフォリズムを舐した。」⁶⁾と告白しているように、一九二一年に書かれた『南京の基督』は、芥川がキリスト教を嘲るために「切支丹物」を書こうと方向転換したその直前に書かれた作品といえることができるかもしれない。ゆえに、この作品

の中には、主人公に注がれた芥川の優しい目と彼女の純朴な信仰に對する冷めた目の両方が窺える作品となっている。そういう意味においては、「愛する」ために書かれたものと「嘲る」ために書かれたものとの過渡期にあたる作品と言えるかもしれない。また、芥川はこの作品の舞台を幻想的な雰囲気を持った南京の一私窩子(私娼)の部屋に設定し、冒頭から異国情緒あふれる彼女の部屋の描写で始めている。ここで読者の心は、すぐに遠い南京にタイムスリップしてしまふのであるが、このような別空間の用い方は、芥川の「愛」と「嘲り」を違和感なく表現するための場所の設定であると思われる。

『南京の基督』の主人公「宋金花」は、カトリック教徒でありながら年老いた父を養うために仕方なく私窩子(私娼)をしているが、それでもキリストによる「救い」を信じている。或る日、金花は楊梅瘡(梅毒)に犯されていることを知り、客を取ることをやめる。しかし、十字架のキリスト像に生き写しの外国人は拒むことができず

に抱かれ、翌朝楊梅瘡(梅毒)が治るといふ「奇蹟」を経験する。この話を聞いた日本人旅行家は、私娼を買った男が梅毒で発狂したという話を思い出すが、彼は彼女にその真実を伝えずに「西洋の伝説のやうな夢」を見させたままにするのである。

この作品は、読む人に異国情緒たっぷりの世界と純粹でけなげな少女の姿を見せてくれるが、最後に日本人旅行家によって、読者のその夢のような世界が壊される。芥川特有のオチ(曝露)によって現実世界へ引き戻されるからである。しかし、この最後があるからこそ、「神聖な愚人」の話が完成するとも言われている。この「神聖なる愚人」とは、『じゅりあの・吉助』(一九一九(大正九)年)の作品の中に登場した言葉で、現実を超えた世界を見つめることによつて純粹な信仰を持ち続けた人に対する芥川の憧憬を込めた表現である。

この「南京の基督」は、芥川の代表的な作品の一つとされ、その文体や形式については高い評価を受けた。しかし、その内容のゆえに、発表直後は、「趣味ばかりで固めたメルヘンの領域」⁽⁷⁾、「巧いものだと云ひたくなる。が、この作はたゞそれだけの物に過ぎない」と酷評されたが、その一方では、その内容のゆえに、多くの人から研究されてきた作品とも言える。それは、この作品が「見メルヘンのように描かれていることとその中に「曖昧さ」や「躊躇」があるため、読む人によって様々な世界を設定することができるところからである。また、これは芥川自身のキリスト教に対する曖昧さ

であり、躊躇であるとも言える。それゆえに、多くの人々がこの作品に関心をよせ、曖昧さと躊躇の根本原因を探ろうとさまざまな解釈をこの作品に与えてきた。その中でも読者の関心の中心は、「金花の病気が治癒したのか」、もし、日本人の旅行家から事実を聞かされたら「金花の信仰はどうなっていたのか」という二点に集約されると言える。これらの問題に答えを出すためには、この作品の中の「何が現実で何が虚構」なのかという点を明らかにしながら、「知ること」と「信じてこと」の相違についてキリスト教的見地から論じてみたいと思う。

二. 治癒の現実と虚構

金花の楊梅瘡(梅毒)の治癒は「現実」であったのか、それとも「虚構」であったのかという問題は、今までさまざまな角度から論じられてきた。従つて、作品のその箇所を取り上げながら考察してみたい。

金花は梅毒にかかり、その治す方法として誰かに「うつし返す」ということを朋輩から教えてもらう。しかし、それよつてうつした相手の病状がもっと悪くなることを知らされ、他人に迷惑をかけたくないとの思いから、以後、客を取ることを拒む。そのような金花であったが、自分の部屋にかけてある「十字架の基督」の面持ちに似た外国人を見た時に、思わず身体を許してしまう。そして、キリストと共に天国のキリスト家にいる夢を見るのである。そこでは、

食卓にご馳走が並べられ、キリストからそれを食べると病気がすぐに治ると言われる。翌朝目が覚め、我に返った金花は、楊梅瘡が治ったことに気づくが、その「奇蹟」は、キリストによってもたらされたと思うのである。

この「奇蹟物語」の設定が、この作品を「お伽噺」、「メルヘン」と言わせた一つの原因でもあるが、芥川は金花の身体から梅毒の症状が消えたことについて、実は、現実の答えを用意していた。それは彼の南部修太郎宛の手紙の中に見ることができる。南部修太郎は新聞の書評の中で『南京の基督』を「小奇麗に小器用に纏め上げた Fiction を書いて、気持好ささうに遊んでゐる」と酷評したが、芥川はそれに対して、この書評が出た四日後（一九二〇年（大正九年）七月十五日付）に彼に手紙を書いて反論した。

あの日本人旅行家が金花に眞理を告げ得ない心もちは何故遊びに随してゐるか僕等作家が人生から *Odious truth* を擱んだ場合その暴露に躊躇する気もちはあの日本旅行家が悩んでゐる心もちと同じではないか君自身がさう云ふ心もちを感じる程残酷な人生に對した事はないのか君自身無数の金花たちを君の周囲に見た覚えはないのかさうして彼等の幻を破る事が反って彼等を不幸にする苦痛を嘗めた事はないのか（南部修太郎宛書簡、一九二〇年七月十五日付）（傍点筆者以下同様）

芥川はその中で、この日本人旅行家がしたように、人生を深く考えていく作家は、「*Odious truth*（残酷な眞実）」に出会うが、それを知りながらも誰かに伝えない思いやりの経験があると語っている。また、それを知らずに過ごしている「無数の金花たち」を現実に見

るといのである。要するに、この手紙により『南京の基督』は、芥川にとって単なるメルヘンでも遊びでもなく、芥川が作家として経験した現実に出たところの真面目な作品であるということ語っている。と同時に、「無数の金花たち」を実際に周囲に見るということは、そのような現実をふまえてこの作品を書いているということ芥川の現実の姿をも示している。こう考えると、金花の姿はさらに現実味を持って迫ってくると言えるのではないであろうか。

また、二通目の手紙の中で（一九二〇年（大正九年）七月十七日付）芥川は、『南京の基督』の中に出てくる金花の梅毒の症状が消えたことや日本人旅行家の言葉によると、金花が梅毒をうつしたと思われる *George Murry* が、梅毒のゆえに発狂したことは医学的な根拠があるということをや々と述べている。

2：附記 売笑婦が健全でも伝染した梅毒の為に相手の男が死ぬ場合は多くある殊に外国人に移った場合は余計多いそれを莫迦げた事だと思ふのは君の見聞が狭いからだ（後略）……

3 *Odious truth* 云々の条は更に個條を分けて反問する

（イ）金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第三期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだから君が治るものかと威張つても治るのだから仕方がないもし君が今日の泌尿器医学の記載を覆す事が出来るのなら僕は君に降参するさもないければ君が降参すべきだ（南部修太郎宛書簡、一九二〇年七月十七日付）

前述したように、金花の梅毒の症状が消えたということは、奇蹟

による「完全な治癒」なのか、「みせかけのもの(潜伏期)」なのかという論議は、今までさまざまな形でなされてきた。また、三好行雄はその考証は無用としながらも、芥川が手紙に書いた梅毒特有の潜伏期が、一夜にして起こることまでもが当時の泌尿器医学に記載されていたのかという点を疑問視している。この論に三好氏が深入りしなかった理由として、この手紙が「南部の批評に触発された芥川の強弁」と捉えていたことと、この作品が手紙の事実をふまえて書いているとするならば、奇蹟か潜伏かという論は不要になり、「はるかに残酷に、人間の〈幸福〉が危うい、一瞬の錯覚のなかにしかないことを、しかも、それがどういう代償を支払わねばならぬかを見抜いている」からだとしている。つまり、この手紙が積極的に取り上げられることによって、『南京の基督』それ自体の話の可能性が限定されたものになるとの危惧しているのである。

これに対して、鷺只雄氏は、「梅毒の症状が段階的に悪化するのに応じて一時的に外部的徴候が消滅し、〈潜伏〉があたかも平癒のごとき観を呈するという事実―この梅毒に固有の症状が絶妙の利用によって、作品は構成を保証される」と述べ、「潜伏」自身が「奇蹟」であるとしている。そして、その立場を取り、大正時代に出版されていた『花柳病診断及治療法』を取り上げ、医学的な根拠から補足したのが笠井秋生氏で、「芥川は、顕症梅毒と潜伏梅毒が交互に現れるという梅毒固有の症状や、外国人から感染した場合は第一期・第二期の症状を経ずにすぐ第三期の症状を呈するということを

十分知ったうえで、『南京の基督』の執筆にとりかかった」と考えているのである。しかも、梅毒の自覚症状があった時点で金花は、既に第二期に入っており、George Murryと関係を持って一夜にしてその症状が消えたということは、潜伏期に入ったことで説明がつくこと、二回目に日本人旅行家が金花のもとを訪れた時は翌年の春であるが、その潜伏期は通常一ヶ月から六ヶ月程度続いたため、金花が日本人旅行家に「その後一度も煩っていない」と答えたことに医学的な問題は生じないが、金花の潜伏期は既に終りにさしかかり、症状が現れる段階が迫っていることになる。また、友重幸四郎氏は、「芥川は医学的知識を十分に知っていて、それを作品の構想の一部に利用した、とみる方が妥当であるように思われる」と両氏の論に賛成している。

確かに、芥川が当時の医学的事実を調べた上で『南京の基督』の執筆したことは、この手紙で明らかにされたと言えるかもしれない。しかし、ここで注意しなければならないことは、芥川の書簡は、南部修太郎の書評に対して激怒したゆえの書簡であるという事実である。もし、彼が好意的な書評を書いたのであれば、芥川が梅毒に対して詳しい知識があったことは世に出なかったであろう。さらに言えば、芥川がこのような手紙を書いたとしても、もし、その手紙が世に出なければ、上記のような論議もなされなかったはずである。つまり、これらはどちらにしても偶然的産物の上に成り立っている論議なのである。しかも、これらは作品の外で論議されている。

従って、『南京の基督』を論じる場合、背後に芥川特有の緻密な計算があったということをふまえながらも、医学的な見地に立った梅毒の事実を前面に押し出すのではなく、金花が潜伏ゆえの再発や再罹患という現実に出会った時、それをどう受け止めるのかという点に焦点をあてるべきであろう。また、この作品を読む限りにおいては、実は金花は、「奇蹟はなかった」という「Odious truth(残酷な真実)」から守られている存在でもある。旅行家がそれを伝えないからである。ゆえに、キリストにある「奇蹟」を純粋に信じている金花をどう捉えるのかという点も論議されるべきである。

三、信仰の現実と虚構

芥川が自殺した際、その枕辺に聖書が開いてあったことは有名な話である。この逸話が示すように、芥川は若い時期からキリスト教に惹かれ、それを題材として作品を書き続けた作家であった。

僕は年少の時、硝子画の窓や振り香炉やコンタスの為に基督教を愛した。その後僕の心を捉へたものは聖人や福者の伝記だった。僕は彼等の捨命の事蹟に心理的或は戯曲的興味を感じ、その為に又基督教を愛した。即ち僕は基督教を愛しながら、基督教の信仰には徹頭徹尾冷淡だった。しかしそれはまだ好かった。僕は千九百二十二年來、基督教の信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短篇やアフォリズムを呟した。しかもそれ等の短篇はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしてゐた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反って基督教を愛したのだった。

芥川のキリスト教に対する関心は、魅力的な日常の風景から起こ

た。そして、クリスチャンの生き様に心を傾けたが、それは冷淡なものであったと述懐している。芥川が書く切支丹物の中には、キリスト教を嘲るものがあり、または芸術のために単に道具として利用するものがあったというのである。これが『南京の基督』が「キリスト教の信仰や信徒を嘲る意図をもった作品」と評された所以である。しかし、それに反して芥川はキリスト教を愛したという。また、芥川は、晩年、「芸術的にキリスト教を―殊にカトリック教を愛してゐた」とも述べている。佐藤泰正氏は、芥川には「思想と文体の乖離」があり、「切支丹物は、この矛盾、乖離の最もあざやかな顕現の場所であった」と述べている。それゆえ、たとえキリスト教を嘲笑し、愚弄するような作品があったからといって、「そのまま人間芥川とキリスト教との関わりに、単純化してしまうことは多くの誤謬を生む」とも言われている。

では、芥川は『南京の基督』の主人公金花をどのような信仰の持ち主として描いているのであろうか。今まであまり詳細に取り上げられなかったキリスト教の視点から見たいと思う。

金花は、五歳の時に洗礼を受け、以来「羅馬加特力(カトリック)教の信仰をずっと持ち續けて」いる十五歳の娼婦である。キリスト教徒でありながら、娼婦であるという「罪の姿」に対して、それは生きていくために仕方ないことだとしている。それは年老いた父親を養うための「自己犠牲」であり「献身」であるという理由のもとに成り立った論理である。しかも、尚且つキリストによる救いを

確信している。⁸⁰ この考え方に対して、宮坂覺氏は、金花のこの考え方は「東洋的エトス」、つまり「孝道」であると定義している。⁸¹ 金花がキリスト教信仰と孝道を取り違えた理由として、「ほとんど自覚がない時からの習慣的に奉ずる信仰」であったことがあげられている。しかし、この「孝道」は、人に迷惑をかけてはならないという彼女の別の倫理観の前には無力である。金花が梅毒を病み、それを誰かにうつした場合、ひどいものになると知った際に、親を養うことよりも、他人の幸せを壊さないことを優先させるからである。

このような金花の心の拠り所は、壁にかかっている小さな「受難の基督の十字架」であった。この十字架への執着から、それは純粹なキリスト教信仰ではなく、その「十字架のキリスト像」、ひいてはその面持ちに似ていたがために、金花が「一夜南京に降った基督」と信じたその「南京の基督」そのものに限定された信仰であるとも言われている。⁸²

また、鷺只雄氏は、彼女の信じている神は「日本的な神」で、厳しさをもって「罪を裁く」「父の宗教」ではなく、愛をもって「罪を赦す」「母の宗教」であるとし、さらに越智幸恵氏は、金花の「母なるキリスト教」と日本人旅行家の「父なるキリスト教」という「相反する宗教が併存している」ことを指摘している。⁸³ しかし、この両面は、相反するというよりも互いに補完しあいがら存在するものがキリスト教である。そして、イエスに関しては、裁く神というよりも、むしろ「救う神」という側面が強い。社会の底辺に押

しやられた者、生きる希望を失った者に愛を示し、徹底的に信じようとする者、求める者に究極の救いをもたらしたのが、イエスだからである。そして、金花もイエスを救い主であると徹底的に信じた一人であった。このような金花が George Murry との一夜を共にした後、身体が治癒したことに気付き、彼がイエスであったと確信して祈りを捧げる。「彼女は思はず襦袢衣(したぎ)の儘、轉ぶやうに寢臺(ねだい)を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に脆(ひざまづ)いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈禱を捧げ出した。∴」芥川は金花を「マグダラのマリア」と重ね合わせて描いているのである。

新約聖書によれば「マグダラのマリア」は、イエスのガリラヤ伝道中に、十二弟子と共にイエスに従った大勢の女性たちの一人で(ルカ八・一〜三)、彼女は、イエスによって「七つの悪霊」追い出してもらった経験を持つ(マコ十六・九、ルカ八・二)。この「七つの悪霊」とは悪質の病のことである。当時、重い病にかかった人に対しては、「罪の結果」であるとの偏見があり、社会はそのような人を排斥する傾向があった。ゆえに、彼女は人々からは蔑まれ、希望のない人生を歩んでいたと思われる。しかし、イエスによって癒された彼女は、それ以来、イエスの献身的な弟子の一人となったと言われている。イエスが最後に弟子たちと共にエルサレムに向かった時、マリアもその中におり(マコ十五・四十〜四十一)、イエスが十字架にかけられた時、自分たちも捕えられることを恐れてほとん

どの弟子は散り散りに逃げ去ったが、マリアも含めて女性たちは、イエスが息を引き取り、遺体が墓に埋葬されるまでずっと付き添っていた(マコ十五・四十七、四十七、ルカ二十三・二十七、ヨハ十九・二十五)。そして、彼女は安息日を守った後、日曜日には一番初めに墓を訪れた女性たちの一人であった(マタ二十八・一、マコ十六・一、ヨハ二十・一)。また、マリアは、復活の主最初に会おうという荣誉が与えられた女性でもある(マコ十六・九、ヨハ二十・十一、十六)。そして、イエスに出会った後、弟子たちにこの復活の出来事を知らせる役割を担った(マタ二十八・七、マコ十六・十、ルカ二十四・八、十、ヨハ二十・十七、十八)。

マグダラのマリアは、「深い敬愛をもってイエスを慕い、女性的純真さをもってイエスに仕えた」女性である。その彼女を悲惨な状況から救ったのがイエスである。当然ながら言い尽くせないほどのイエスへの感謝があったであろう。しかし、その頃イエスのグループは確固たる経済的基盤もなく、その教えは時の権力者からは異端であり、神を冒瀆するものとされ、しかも、機会あれば、イエスを捕えて殺そうとする不穏な動きさえあった。そのような状況の中で、イエスに従うとは、ただ感謝を現わすという軽い気持ちだけでは、難しい。そこには個人としての強い意志と徹底的に謙遜で、柔順な態度が必要であった。そして、それを支えるものがイエスを信じるという「信仰」である。

聖書には、「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によっ

て歩いているのである。」(コリント第二、五・七)という言葉がある。「ここにある『見えるもの』は、人間の経験や理性による判断」で、信仰はそのようなものを超えたところにある確信や希望から成り立っている。また、信仰とは「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。」(ヘブル十一・一)とも書いてある。つまり、信仰とは「信じているものが真実であり、期待しているものが必ず来ると確信することである。希望とは単に憧れをもって待ち望むことではなく、確信を持って待機すること」であり、「ある可能性に期待をかけるのではなく、ゆるがぬ確信に固く立つこと」なのである。このような視点に立った時、芥川は金花を徹底的に「信じる者」として描いていることに注目すべきであろう。これはマグダラのマリアが徹底的にイエスを信じ、従ったことに通じるものである。宮野光男氏は、このマリアの「ひたむきさ」に焦点をあて、金花とマグダラのマリアを積極的に関連付けている。では、金花をこのような人として描くことによって、芥川は何を私たちに訴えようとしたのであろうか。

四、近代知識人の現実と虚構

河泰厚氏は、『南京の基督』の一章、二章で「芥川創作の〈神聖な愚人〉の信仰とはどのようなものであるかを描いた後」、三章で「この信仰をめぐる、いわゆる近代知識人はこれをどのように評価するかという重大な問いかけがなされている。」として評している。その

近代知識人の代表が「日本人旅行家」である。そして、この作品を読む多くの人が、この日本人旅行家の目を通して物事を見ていると思われる。これは疑いもなく自分を「近代知識人」と思っているからである。では、その「近代知識人」を代表する「日本人旅行家」を客観的に見るとどのような姿が現れてくるであろうか。

この「日本人旅行家」は、金花の部屋を或る春の日に訪ねて、一晚過ごしている。その際、壁にかかっている十字架を見てそれを話題に、金花が「耶穌教徒」であることを確認し、「しかしだね、——しかしこんな稼業をしてゐたのでは、天国に行かれないと思やしないか。」と問いただしているのである。彼は、金花がキリスト教徒でありながら、私娼という罪深い仕事をしていること、そして、彼女がその矛盾を深刻に受け止めていないばかりか、それでもなお「天国」に行くことができると確信していることに「微笑」する。

この金花の矛盾に対して読者は、日本人旅行家と同じ反応を示すだろう。しかし、その私娼を買っているこの日本の旅行家の道義的な問題はどうかであるだろうか。これに対して中村三春氏は、「彼が金花の職業と醜業と悪い、その信仰を揶揄することすら欺瞞のほずである」と述べている。ある意味において、「知」というところとは遠い場所で生きていると見下している者がかかえている矛盾に対する「微笑」であるが、その女性の性を弄んでいる「知」の行動の矛盾に「微笑」ではすまされない何かを感じるものである。これは「近代知識人」と呼ばれる人の〈歪み〉をつきつけられた場面であ

るとも言える。

次に、日本人の旅行家が金花の部屋を訪れたのは、半年後のことであつた。彼は、まだ十字架をかけてあることをひやかすように話題にするが、その話をきっかけにして、金花は真面目に「一夜南京に降った基督」によって自分の病が癒されたという話をする。この話を聞きながら、彼は別の話を思い出す。悪性の梅毒をうつされて発狂してしまつた混血の男の話である。

「おれはその外国人を知つてゐる。あいつは日本人と亜米利加人の混血児だ。名前は確か George Murry とか云つたつけ。あいつはおれの知り合ひの路透電報局の通信員に、基督教を信じてゐる、南京の私寓子(しくわし)を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて来た」と云ふ話を得意らしく話したさうだ。おれがこの前に来た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊つてゐたら、顔だけは今でも覚えてゐる。何でもやはり英字新聞の通信員だと称してゐたが、男振りに似合はない、人の悪るさうな人間だつた。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう発狂してしまつたのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない。しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶穌基督だと思つてゐる。おれは一体この女の爲に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」

彼は金花がその男のことを「一夜南京に降つた基督」で、その人から病気が癒されたと信じていることに対して、「蒙を啓いてやるべきかどうか」と自問自答する。この「蒙」という言葉に読者は引き込まれ、「蒙」を語るべき対象の金花の姿にばかり注意がいつて

しまうが、この話によれば、少なくとも金花が梅毒を煩っていたことは事実であり、その症状からすると、この日本人旅行家が以前金花と関係をもった時には既に梅毒にかかっていた可能性があるので、彼は自分がその男の二の舞になるのではないかという危惧はないのであろうか。それにも拘わらず、相手に対して「蒙を拓いてやろうかどうしようか」と逡巡している姿は滑稽である。さらに、また、この話を聞いた後も、彼は金花との関係を持つとするのであるのかという疑問も残る。しかし、これも「近代知識人」と自負している人の現実の姿なのである。

第三番目に、そしてこれが一番重要な点であるが、彼が金花の話聞きながら、思い出した男の話の「信憑性」である。この点に対して、西山康一氏は「『さうだ』た『事によると』かも知れない」といった表現によって、この日本の旅行家によって示された「真相」もまた、実は彼の見聞に基づく推測でしかない」と指摘している。これはこの作品を読む場合に大切な視点であると思われる。つまり、近代知識人の判断基準も結局は、「風評の上に立った仮定」の上に成り立っていることを示すものだからである。

実は、これは私たちが面している現実の危うさを示していると言える。私達が真実であり、正しいと思っていることは本当に真実であり、正しいのであろうか。また、これは私たちの信じている世界に、「揺るぎのない真実」や「絶対的な正しさ」が存在するのだろうか。この問いに対して誰も「存在する」と答えることができない

と思う。と言うことは、金花が住んでいる世界と大差ないところに「近代知識人」を自負している私たちもいるということの意味し、自分の世界は「現実」で、金花の世界が「虚構」と思っている作品を読んでいた私たちの視点の甘さに気づくのではないかと思われる。さらに、「近代知識人」と金花を比較した場合、同じ世界に住みながら、「平安」という点で開きがあることも指摘したい。これは「奇蹟」や「救い」を信じ、受け入れている金花とそうでない「近代知識人」の開きである。この平安によって金花には実際の癒しが与えられているとも言える。では、「奇蹟」や「救い」の存在から遠い「近代知識人」は、どこからその平安や癒しを得ることができるのであろうかという新たな問いがここから生まれる。

五. おわりに

「自然主義思潮の反動として理想主義的、浪漫的傾向が復活するに伴ひ、宗教特にキリスト教に対する関心が増大したことは明治末年から大正期に亘ってかなり自立つ文壇の一風潮であった。」という。これに対して芥川は、「我我は神を罵殺する無数の理由を發見してゐる。が、不幸にも日本人は罵殺するに価するほど、全能の神を信じてゐない。」これは芥川らしい皮肉であるが、日本人が風潮としてのキリスト教を受け入れてはいても、信仰としてのキリスト教を受け入れていなかったことを示す言葉であると言える。そのよ

して「冷淡でありながら愛し」、また「軽んじながら愛した」⁸⁵のである。

その相反する思いを保ちながらそれを作品に反映していった作家でもある。また、彼は「自己のいくつかの側面をバラバラに切り離して強調する作家であり、それを総合的に語ることはめったにしない作家」であり、「分裂のただ中にいる生身の彼自身のとまどいや苦悩を語る事が非常にまれだった」にも拘わらず、『南京の基督』の中で彼は、「彼が逢着していた人生上の一つの迷いを、読者の胸に訴えかけようとした」というのである。

そのような彼が到達したものは、『南京の基督』にも描かれている「〈神聖な愚人〉への限らない憧憬と、もう一つはその世界を裁断せんとする自身の理性への限界への自覚である。」⁸⁶そして、彼自身は「理性のわたしに教へたものは畢竟理性の無力だった」と告白している。そして、「真実(事実)と幸福、知と信の背馳というところに芥川の問題意識は向かっていた」という。

しかし、「知」と「信」をどのように定義し、求めるかが問題であると言える。というのは、キリスト教の信仰的側面から言えば、「知」と「信」、即ち神(イエス)を「知ること」と「信じること」は異なるからである。前者は知識についていえること。即ち、イエスのことについての知識を意味し、個人との関係がそこにはない。それに対し、後者は、信じるという時に、自分と神(イエス)と直接の関係が存在する。いわば、自分の罪を認め、贖い主としてのイエス

芥川龍之介『南京の基督』からの問いかけ

を心に受け入れる個人的関係がある。「理性」で知っていること、個人的なかわりを持つことは、全く別の次元に属するものである。信仰とは理性を超えたものであり、「信じる」ことには知的に納得しない部分にも「信」を賭けることが求められる。そうすることによって、たとえ、梅毒が治癒していない現実には接したとしても、それを受け入れることができる。神(イエス)を受け入れることによって、「最終的な救い(天国)」が約束されているからである。このような生き方は平安のある生き方で、金花の姿にも通じるものがあると言える。そしてこの最終的な救いは、虚構かもしれない現実世界の中にある私たちにも究極の平安を与えてくれるものである。

このようなことを考えると、限界がある「知(理性)」に頼り、それだけが現実であると頑なに信じている人に対して、実は「蒙」を拓いてもらわなければならないのは、誰なのかという問題を『南京の基督』は提供しているのかもしれない。

《注》

- (1) 駒尺喜美編、「芥川龍之介作品研究」、八木書店、一九六九年、一一〇頁。
- (2) 芥川龍之介、「ある鞭、その他(仮)」、『芥川龍之介全集』第二十三巻、岩波書店、一九九八年、二二二頁。
- (3) 駒尺喜美編、前掲書、一一〇頁。
- (4) 宮坂寛、「『南京の基督』論」—金花の〈仮構に潜むもの〉—、『文藝と思想』第四〇号、一九七六年(昭和五十一年)、二十八頁。
- (5) 関口安義、「理性の彼方へ」—『南京の基督』、「神神の微笑」—、海老井

- 英次・宮坂覺編、『作品論芥川龍之介』、双文社出版、一九九〇年、二四八頁。
- (6) 堀辰雄、「堀辰雄全集」第四卷、筑摩書房、一九七八年、五八一頁。
- (7) 久米正雄、「続七月の文壇」、『時事新報』、一九二〇(大正九年)、七月十四日。
- (8) 南部修太郎、「最近の作品を読む」、『東京日日新聞』、一九二〇(大正九年)、七月十一日。
- (9) 米栖真人、「芥川龍之介『南京の基督』論」、『別府大学紀要』第二十五号、一九八四年、十六頁。
- (10) 三好行雄、『芥川龍之介論』、筑摩書房、一九七六年、二二三頁。
- (11) 南部修太郎、前掲書。
- (12) 芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第十九卷、岩波書店、一九九六年、八十一頁。
- (13) 前掲書、八十二―八十三頁。
- (14) 三好行雄、前掲書、二二四頁。
- (15) 前掲書、二五―二六頁。
- (16) 鷺只雄、「『南京の基督』新攷」―芥川龍之介と志賀直哉―、『文学』第51号、岩波書店、一九八三年、五四頁。
- (17) 笠井秋生、『芥川龍之介作品研究』、双文社出版、一九九三年、一四二頁。
- (18) 前掲書、一四一―一四二頁。
- (19) 前掲書、一四二頁。
- (20) 友重幸四郎、「『南京の基督』素描」、『四国大学紀要』、A人文・社会科学編、第七号、一九九七年、二七七頁。
- (21) 芥川龍之介、「ある鞭、その他(仮)」、前掲書、二二二頁。
- (22) 笹淵友一、「芥川龍之介のキリスト教思想」、『國文學 解釈と鑑賞』七月号、一九五八年、十一―十一頁。
- (23) 芥川龍之介、「西方の人」、『芥川龍之介全集』第十五卷、岩波書店、一九九六年、二四六頁。
- (24) 佐藤泰正、『芥川龍之介論』、『佐藤泰正著作集』第四卷、二〇〇〇年、一七九頁。
- (25) 宮坂覺、「芥川龍之介とキリスト教」―その二面性(カトリシズム・プロテスタンティズム)をめぐる―、笹淵友一編、『キリスト教と文学』、笠間書院、一九七五年、七三頁。
- (26) 鷺只雄、前掲書、五一頁。
- (27) 宮坂覺、「『南京の基督』論」―金花の〈仮構の生〉に潜むもの―、前掲書、二十九頁。
- (28) 前掲書、四十三頁。
- (29) 河泰厚、『芥川龍之介の基督教思想』、翰林書房、一九九八年、一六一頁。
- (30) 五島慶一、「『南京の基督』論」―〈物語〉と語り手―、『日本近代文学』第六十二集、二〇〇〇年、六一頁。
- (31) 水洞幸夫、「芥川龍之介『南京の基督』試論」―金花の身体、「旅行家」の身体―、『金沢学院大学文学部紀要』第六集、二〇〇一年、三六―三七頁。
- (32) 鷺只雄、前掲書、五十一頁。
- (33) 越智幸恵著、「芥川龍之介『南京の基督』論」、『玉藻』、第31号、一九九六年三月、一一八頁。
- (34) 芥川龍之介、「南京の基督」、『芥川龍之介全集』第六卷、岩波書店、一九九六年、二五二頁。
- (35) 馬場嘉市編、『新聖書大辞典』、キリスト新聞社、一九七一年、一三二―一三八頁。
- (36) 前掲書、一三二―一三八頁。
- (37) 『聖書』(口語訳)、日本聖書協会、一九八二年。

- (38) 馬場嘉市編、前掲書、七一九頁。
- (39) ウィリアム・パークレー、『ヘブル』、ヨルダン社、一九七一年、一六二頁。
- (40) 宮野光男、「芥川龍之介『南京の基督』を読む―マグダラのマリヤのよくな宋金花―」、佐藤泰正編、『芥川龍之介を読む』、梅光学院大学公開講座論集第五十一集、笠間書院、二〇〇三年、一一五頁。
- (41) 河泰厚、前掲書、一五九頁。
- (42) 芥川龍之介、「南京の基督」、前掲書、二三八頁。
- (43) 中村三春、「混血する表象」―小説「南京の基督」と映画「南京的基督」―、『日本文学』Vol. 五十一、二〇〇二年、一九頁。
- (44) 芥川龍之介、「南京の基督」、前掲書、二五二―二五三頁。
- (45) 水洞幸夫、前掲書、四四頁。
- (46) 西山康一、「『幻想』／『迷信』としての〈中国〉」、『文学』、二〇〇二年、第三卷・第三号、二〇六頁。
- (47) 笹淵友一、前掲書、九頁。
- (48) 芥川龍之介、「侏儒の言葉」、『芥川龍之介全集』第十三集、岩波書店、一九九六年、六十頁。
- (49) 芥川龍之介、「ある鞭、その他(仮)」、前掲書、一五六頁。
- (50) 駒尺喜美編、前掲書、九五―九六頁。
- (51) 河泰厚、前掲書、一七四頁。
- (52) 芥川龍之介、「侏儒の言葉(遺稿)」、『芥川龍之介全集』第十六卷、岩波書店、一九九六年、七〇頁。
- (53) 駒尺喜美編、前掲書、一〇五頁。

* 付記：本稿は以前別タイトルで発表しているが、今回加筆訂正によって、完成稿としたものである。